


# 六花

6

俳句雑誌りつか  
2012 (平成24年)  
Cover Dress of Little Bird



# 山田六甲

## 琴

も 沐浴の閑得し鳩や春落暉  
う 鶺鴒は嘴で水を突き刺し潜りけり  
せ 瀬をつなぐ魚道を鮎の走りきる  
ん 梅は実に懲らせば見ゆる北斗星  
の 乗込の背鰭で水を切りにけり  
あ 虻に眼が合うて振り向く癖つきぬ  
か 亀鳴くと葦の根許の暮れにけり  
が 雁風呂の徳利洗うてをりにけり  
ね 練切を茶請に春の野点かな  
む 麦秋や父と同じの病来て

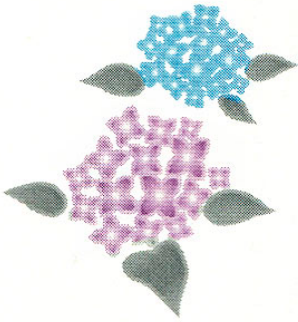
た 滾つ瀬を光の鮎となりて蹴る  
し しがらみにすがりつく杭春の水  
は 背後より過ぎたる虻の戦闘機  
な 鳴砂に虚けてゐたる桜貝  
ぐ ぐらぐらの揺ぎ岩なり滝の前  
も 洩れ来たる日に蜘蛛の巣の飾らるる  
り 緑風につままれて絮飛び立ちぬ  
こ 木下闇桶の割れたる釣瓶井戸  
と 時置いて鳴く杜鵑待ちにけり  
り 琉球の畳に遊ぶ三尺寝

せ 背丈まだ高みへ竹の皮脱ぎぬ  
い 岩山に行幸の碑や霾る  
き 桐の花深瀬をはさみ咲きにけり  
ん 麦熟れて畑の奥の透きにけり  
ち 手水へと龍は水吐く落花かな  
し 鐘楼に鐘なく茅花流しかな  
よ 過ぎりけり牡丹を盗む目つきして  
う 苜蓿摘みて腕輪を手向けむか  
し 敷島の天の浮石若葉冷  
ん 村雨にけぶれる紫雲英畑かな

よ  
横風に煽られてゐし巢立鳥  
に  
濁りゐる水まぬがれず水馬あめんぼう

ことり句碑除幕六月十二日

緑蔭に命日の茶をいただきぬ



# 白梅や曲りし枝の又曲り

永田万年青

はくばいやまがりしえだのまたまがり

ながたおもと

白梅のつぼみの中に花ひとつ  
地に刺さり弓形したる枝垂梅  
真直ぐな枝にひしめく梅の花  
竹塀の紐の朽ちゐる余寒かな

梅の枝は幾枝にも折れ曲がっている。その枝を目でたどつていくと、あみだ籤のように折れて曲がつてさらに曲がつている。と気がついた。俳句にはこのような集中力と粘りが大切だと教えてくれる。万年青俳句は実直すぎるほど実直。悪くいえば柔軟性が無いといえるが、彼には柔軟性がない良さがある。「万年青さんの実直さには敵わない」とことりは脱帽した。実直俳句はたとえ平凡であっても陳腐さが無い。これこそが俳句には大切。意外性は平凡の中の日常にひそんでいゝ。頭の中にひそんでいゝものを引き出そうともがくと陳腐な作品しかできない。

# ひと鍬ごと風に乾きて春の土 大内 幸子

ひとくわごとかぜにかわきてはるのつち おおうちゆきこ

明け初めて始発列車の名残雪

暦には発つ日記さず養花天

雪解川鴉水浴びして発ちぬ

眠る山起こし銃声川渡る

春耕の場面。ひと鍬は時間も表す。ひと鍬を入れるごとに土が春風に乾いていく。春風の実感である。感覚的にはひと鍬いれるごとに乾く実感を共感できる。一心に耕しているから、ひと鍬打ち返すごとに、顔を上げて土の状態を見るわけではない。がふと顔を上げると耕してきた土の表面がすでに乾いているのに気づいた。ああ、春風が吹いて乾きが早くなつたなあという感動である。第三者が耕しているのを見ている場面とも解釈できるが、自らが耕しながら土の乾きの早さに感動していると解釈するべきである。

雛の家

笹村政子

桃の花活けて旧家のうすあかり  
流し雛もんどり打つて波に乗る  
雛の家背に雨宿りしてをりぬ  
ひとかきの手波にくづる春の雲  
瞬きは母のまなざし春北斗

ジーパーン

松本文一郎

ジーパーンの干して二日目春を待つ  
盆梅や掴みてはかる開花どき  
雪搔きやじさまと呼ばれ年齢を知る  
春浅く長靴の折れし躡り口  
鳥を撮るカメラの手ぶれ春浅し



せつじゆしゆう  
雪樹集

梅 林 田尻 勝子

梅林へ杉の木立を抜けてゆく  
朝寒や言ひ争ひて勝ちし夢  
紅白を分けて梅花の散つてをり  
蒲の穂の水面に散りて春の寒  
紅の濃き桜一本ありにけり

山 桜 筒井八重子

鶯の声遠くより山桜  
どこまでも桜並木の川土手を  
水音と鶯の声 和音なす  
田んぼ道菜の花畑見付けたり  
川土手をただ一筋に桜かな

# 蛍雪譚 六甲

六月号選後に

大石忌名妓の舞に惚れにけり

佐津のぼる

このような行事物は気をつけないと観光俳句になってしまふ。つまり突っ込みが足りないからだ、掲句は「惚れにけり」とずばつと言いつつたのがよい。京極柁陽に「都踊はヨイヤサほゝゑまし」があり、それくらい突き抜けることも時には必要。以前大井雅人氏だったと思うが、「東吉野の句はおれだ」ではなく「俺が東吉野だ」という句を詠まないといけない、と述べていたことを覚えてる。「〇〇を見てきましたよ」という作品は駄目だと自らにも言い聞かしているのだが…。いけない「言い聞かしている！」と言いつつておく。

切りし尾に振り向きもせず青蜥蜴

未練を断ち切る潔さを詠んだ。「惜しいことをしたように振り向く」などと言いたい材料だが、それは頭で作る句。予定調和で陳腐になる。虚子は「陳腐な作品は採らないが、平凡はよしとする」といった。至言である。

逃げ隠れせずも打たれず油虫

油虫はひよいと体を躲すだけなのに、打つ方がへつぱり腰だから打てない。人間様は完全にゴキブリに見下されている。ゴキブリとヒトでは歴史が違ふ。ゴキブリが地球上に出現したのは約三億年前石炭期であり『生きた化石』とも言われているのだ。ゴキブリにとって、ヒトの七十歳八十歳は「はなたれ小僧」くらいにしか思っていない。「それホイ」「ほらヒョイ」と軽く躲されるのである。

# 六花集

雪 解 川 鴉 水 浴 び して 発 ち ぬ  
眠 る 山 起 こ し 銃 声 川 渡 る  
ひ と 鍬 ごと 風 に 乾 きて 春 の 土  
明 け 初 め て 始 発 列 車 の 名 残 雪  
曆 に は 発 つ 日 記 さ ず 養 花 天  
ひ ざ を つ き 見 落 と し ま じ と 豆 籬  
薬 長 き 梅 に 悌 重 ね け  
妊 れ る 日 の 遠 く あ り 梅 開 くり  
こ の 街 の ま た 行 き 止 ま り 春 の 宵  
蓬 摘 み い つ し か 独 り 残 さ れ て  
ご う ご う と 音 立 て 流 る 雪 解 川  
ま ろ び 寝 の し ば し う つ ろ ふ 春 ぞ た つ  
枝 垂 梅 風 と 遊 べ る 枝 の 先  
盆 梅 の 粹 な 枝 ぶ り 眺 め る て  
春 泥 を わ ざ と 踏 み ゆ く 子 の 笑 顔

小寺ふく子

平居濤子

大内幸子